IATSS review
Vol. 3, No. 2 1977

暴走族の心理学的研究（中間報告）

国際交通安全学会003プロジェクトチーム*

いわゆる暴走族と呼ばれる青少年については、これまで本誌の誌上シンポジウム（Vol. 1, No.1～Vol. 2, No.1）や当学会の研究グループで実態調査が進められてきた。本プロジェクトでは、彼等の生態をさらに明確に把握するために、次の2つの観点から分析調査を実施した。第1に、暴走行為者と一般の青少年の両方を対象とした心理テスト、検査、面接、アンケート調査によって、暴走族と呼ばれる青少年のより深い精神構造および性格傾向を浮き彫りにした。第2に、世間一般の人を対象にした意識調査を行ない、彼等と社会環境との関連についての分析を試みた。これらの結果について、深層心理学、精神医学、社会病理学的に解析し、今日の日本の社会構造、日本人の精神構造にまで言及して、暴走族と呼ばれる青少年の生態と発生の背因を明らかにしようとするものである。

Psychological Studies on Bosozoku an Interim Report

IATSS 003 PROJECT TEAM*

A fact-fiding survey about hot rodders or the so-called bosozoku has been conducted by a survey group of the International Association of Traffic and Safety Sciences. In the present project, we carried out an analytical survey from the following standpoints to further clarify what the bosozoku really are. First, we tried to bring to light the deep mental structure and disposition of the bosozoku through mental tests, studies, interviews and questionnaires conducted on both the bosozoku and ordinary youths. Secondly, a consciousness survey was conducted on ordinary people for analysis of relations between the bosozoku and the social environment. The results were put to depth-psychological, psychiatrical and socio-pathological analyses in an attempt to examine today's social structure and the mental structure of the Japanese people in order to clarify what the bosozoku are and why some youths become bosozoku.

1. まえがき

経済の高度成長期を経て、国民の生活水準は高まり、高等教育も一層普及した日本の現代社会では、一方で、価値の多様化を招き、都市化、核家族化が進み、そのために様々な病める現象があらわれ出している。特に若者は、青春期の課題や悩みを処理する適切な機会も、試練もないままに、進学競争のレールの上をひたすら走るか、あるいは脱落するか、というある意味できわめて重大な選択をせまられている。これは青少年にとって外から与えられたひとつの危機的状況ともいえよう。

このような状況の下に、自由な行動と友人とスピードへの強い憧憬を一つの契機として、いわゆる暴走族といわれる青少年が出現した。彼等は、現在の日本の社会の諸種の歪みとからみあい、非常に切実な、社会的・心理的問題を投げかけている。51年5月の神戸事件を境に、暴走族に対する警察の取り締まりは厳しさを増し、世間の風当りも一層強くなってきた。事態はたえず進展し、流動している。しかし、その底流は変わっていないと推測される。

暴走族に属している青少年の実態については、警察関係者、家庭裁判所、心理学者、教育関係者等により、調査、検討が重ねられ、暴走族出現の背景についても分析が進められている。彼等の行為は、青年期現象として説明できるとか、学歴偏重社会の構造自体に問題があるという社会病理学的見地からの説明もあれば、個人の内的な要因に帰せられるだろうといった説明もあり、立場によって様々な見解がある。

今までの調査により、暴走族といわれる青少年は、進学競争の中で生まれたいわゆるYグループ**との関連がきわめて深いという見方も提出されている。こ

*メンバーは以下の4名である。
詫間晋平（プロジェクト・リーダー） 国立特殊教育総合研究所教育工学研究室長（教育工学）
Shimpei TAKUMA Section Chief, Department of Educational Technology, The National Institute for Special Education
滝沢清人 自治医科大学教授（臨床心理学）
Kiyoto TAKIZAWA Professor, Jichi Medical School
千葉康則 法政大学教授（人間行動科学）
Yasunori CHIBA Professor, Hosei Univ.
野口 薫 千葉大学助教授（心理学）
Kaoru NOGUCHI Associate Professor, Chiba Univ.
原稿受理 昭和52年1月17日

のように暴走族の成因について、ある程度の知見が得られているが、青年期現象、社会構造自体の歪み、内的要因というそれぞれの見方が、どのように暴走行為に関わっているのかは、ひとつずつ明らかにしていかなければならない。

今回の研究では、4人のスタッフが協力して、上記の問題意識のもとに、今までに研究がされていない暴走族に対する世間の人の態度、青少年、特に暴走族の深層心理の把握、および暴走族のその他の特性を明らかにするという意図で各々、分担を決めて、研究を進めた。以下は、それらの「中間報告」を概括したものである。

** Yグループ：学校教育の過程で、若くしてエリートコースから脱落した若者達を指す。
Xグループ：エリートを志向し得て、競争への参加を放棄しないで生きている若者達を指す。
これは必ずしも固定したグループを指すものではなく、Yグループ的要素が支配的な若者達をYグループの若者、Xグループ的要素が支配的な若者達をXグループの若者と呼ぶ。

2. いわゆる暴走族に対する社会的態度

まず初めに、暴走族の行為、あるいは、暴走族の存在そのものについて、周囲の人たちが、どのような態度をもっているかという側面から検討してゆきたい。

暴走族に対する態度は、それぞれの立場、たとえ

Table 1 質問項目およびそれぞれの項目が暴走族に対して示す好意度の平均値と標準偏差値
Statements and their degrees of liking toward bosozoku：average values and standard deviat

item No.	※		平均尺度値	標準偏差
1	U	暴走族の親は子どもに甘すぎる	2.09	1.12
2	F	暴走族は15～17才ぐらいの青少年のあこがれの的である	3.95	1.02
3	U	暴走族になる人は意志が弱く流されやすい人たちだと思う	2.01	1.15
4	U	暴走族は現代の学歴偏重社会では先の見通しの暗い人たちの集まりである	2.04	1.09
5	U	暴走族などは警察の力でびしびし取り締まるべきだ	1.49	0.96
6	U	暴走族は集団でなければ何もできない人たちだと思う	1.72	0.91
7	F	暴走族などと特別視することが、ますます彼らを一般社会から遊離させてしまう	3.67	1.05
8	F	暴走族にとって家庭も学校も職場も居心地がわるい	3.68	0.96
9	N	暴走族はいつも他人の目を意識している	2.62	0.92
10	U	暴走族は運転技術も未熟で、命知らずのおろか者である	1.23	0.57
11	U	暴走族はすぐ乱斗したり、不純異性交遊をする集団だと思う	1.18	0.52
12	U	暴走族は進学競争からの脱落者の集まりである	1.89	1.04
13	N	暴走族の行動は青年期特有の背のびした（つっぱった）行動である	3.12	1.11
14	N	暴走族は同時代の青少年のほんの一握りだから特に問題にする必要はない。	2.75	1.14
15	N	暴走族は交通規則違反をすることにスリルと快感を感じているのだと思う	2.81	1.07
16	U	暴走族の仲間に入ると暴力団、やくざと関わりができやすい	1.76	0.84
17	F	暴走族は学校や職場に友だちがなく孤独である	3.79	1.02
18	U	暴走族になる人は車に乗ったりいじる以外に楽しみがない人たちだ	2.42	1.10
19	F	暴走族の感覚はロックに陶酔する人たちの感覚と同じである。	3.68	0.96
20	F	暴走族はいずれ飽きてやめていくのだからそっと見守ってやればよい	3.86	1.19
21	U	暴走族の行動は社会生活の秩序を無視している	1.57	0.82
22	N	暴走族の家庭では父親がいなかったり、父親の権威がなくなっている	2.85	1.02
23	U	暴走族の行動は自己中心的で他人の迷惑など考えない	1.48	0.85
24	F	暴走族の行動は日々の単調な生活や抑えつけられた生活からの脱出である。	4.21	0.71
25	N	暴走族の家庭では親子の間で気持が通じ合わないことが多い	3.33	1.08

※暴走族に対する好意度は5段階尺度法により平均尺度値を算出。
U：尺度値2.5未満でunfavorableの略
N：尺度値2.5以上3.5未満でneutralの略
F：尺度値3.5以上でfavorableの略

ば高校生と大人の世代、暴走族と同世代にある人でも進学競争で優位に立っている人とそうでない人、大人の世代でも、ジャーナリストと主婦、また、暴走族に関心のない人と、家族、友人に暴走族がいたり、自分も暴走族に属している人とでは、異なるようである。

さらに、個々の人々は、世間の風は冷たいとか、暖かいという場合の「世間」をどのように捉え、特に世間の人達の暴走族に対する見方を、どのように推定しているであろうか。推定されたものの平均像が、すなわち社会規範、社会の標準と見なすことはできないかもしれないが、個人によって推定された世間の人々の考えと、個人の考えとの関わりを問題にした。

2－1　方　法

a）調査対象:

S高	都心部にあるM学院高校2年男子				46
H高	都下にある同じくM学院高校2年男子				102
C大	C国立大教養課程	男 38	女 17		55
M大 I	M学院大昼間部教養課程	男 159	女 74		233
M大 II	〃 夜間部 〃	男 59	女 1		60
女子短大	横浜地区の短大 女子				274
ジャーナリスト		男 35	女 5		40
主婦					53
合計		男 439	女 424		863

Table 2　暴走族に対する自分の態度

被験者群ごとに肯定・否定の%を示す。肯定・否定の合計が100%にならないのは無回答があっだためである。

Own attitudes toward bosozoku

	項目		否定								肯定							
	番号		S高	H高	C大	M大I	M大II	短大	ジャーナリスト	主婦	S高	H高	C大	M大I	M大II	短大	ジャーナリスト	主婦
青年期	2	あこがれ	80.4	67.6	85.5	76.0	61.7	45.6	67.5	60.4	19.6	32.4	14.5	24.0	38.3	53.3	32.5	37.7
	13	つっぱり	19.6	7.8	20.0	13.7	25.0	9.9	15.0	15.1	78.3	92.2	80.0	85.8	75.0	88.3	85.0	81.1
	14	一握り	71.7	79.4	80.0	81.1	83.3	78.8	60.0	67.9	26.1	20.6	20.0	18.0	16.7	20.4	40.0	26.4
	20	いずれ飽きる	69.6	77.5	89.1	81.1	73.3	71.2	52.5	77.4	30.4	22.5	10.9	18.5	26.7	26.6	47.5	18.9
社会・家庭	1	親・甘すぎる	30.4	26.5	21.8	32.6	23.3	25.9	27.5	3.8	67.4	72.5	78.2	66.5	75.0	74.1	72.5	94.3
	4	学歴偏重	67.4	54.9	38.2	60.5	68.3	65.0	57.5	39.6	32.6	45.1	61.8	38.6	31.7	34.7	40.0	58.5
	8	居心地悪	41.3	29.4	23.6	31.3	40.0	27.0	35.0	24.5	58.7	69.6	76.4	68.2	60.0	73.0	65.0	73.6
	12	進学競争	63.0	58.8	54.5	63.5	71.7	71.2	60.0	52.8	37.0	41.2	45.5	36.5	28.3	27.7	40.0	45.3
	22	単調な生活	52.2	48.0	56.4	58.4	61.7	41.2	52.5	39.6	47.8	52.0	43.6	41.6	38.3	57.3	47.5	58.5
	24	親子の気持	19.6	12.7	12.7	21.5	20.0	16.4	22.5	18.9	78.3	87.3	87.3	78.5	80.0	81.8	77.5	77.4
	25	父・不在	26.1	9.8	16.4	15.5	25.0	17.2	30.0	11.3	71.7	90.2	83.6	84.5	75.0	81.8	70.0	86.8
個人	3	意志弱	47.8	34.3	27.3	36.5	53.3	34.7	42.5	24.5	52.2	65.7	72.7	62.2	45.0	64.6	57.5	73.6
	6	集団でなければ	39.1	17.6	27.3	18.0	23.3	20.1	35.0	9.4	60.9	82.4	72.7	81.5	76.7	79.6	65.0	88.7
	9	他人の目を意識	23.9	29.4	20.0	22.7	31.7	24.5	25.0	26.4	76.1	69.6	78.2	77.3	68.3	74.8	75.0	69.8
	17	友人がない	71.7	69.6	52.7	57.5	73.3	55.5	45.0	39.6	28.3	29.4	47.3	42.1	26.7	43.1	55.0	58.5
	23	自己中心的	17.4	16.7	10.9	17.6	13.3	14.2	27.5	0.0	82.6	83.3	89.1	82.0	86.7	84.3	72.5	96.2
一般印象	10	命知らず	50.0	58.8	65.5	61.8	61.7	45.3	70.0	30.2	50.0	41.2	34.5	37.8	38.3	52.2	30.0	67.9
	11	乱　斗	50.0	41.2	45.5	43.3	55.0	49.6	67.5	35.8	50.0	58.8	54.5	56.7	45.0	49.6	32.5	62.3
	15	違反・スリル	41.3	23.5	25.5	29.2	33.3	17.9	22.5	18.9	58.7	75.5	74.5	70.4	66.7	81.4	77.5	79.2
	16	暴力団	23.9	34.3	18.2	24.0	35.0	27.7	37.5	20.8	76.1	64.7	81.8	74.7	63.3	71.2	62.5	75.5
	18	車以外の楽しみ	60.9	63.7	65.5	65.7	76.7	62.4	62.5	39.6	39.1	36.3	32.7	34.3	23.3	36.5	37.5	58.5
	19	ロック	45.7	49.0	41.8	57.5	51.7	37.2	25.0	22.6	54.3	51.0	54.5	41.6	48.3	61.7	75.0	73.6
	21	秩序無視	28.3	8.8	5.5	12.9	13.3	16.1	25.0	3.8	71.7	90.2	94.5	86.7	86.7	82.5	75.0	92.5
対策	5	取り締まれ	34.8	16.7	25.5	25.3	11.7	17.2	40.0	5.7	65.2	83.3	74.5	74.2	86.7	82.8	60.0	92.5
	7	特別視	34.8	23.5	41.8	38.6	25.0	23.7	27.5	26.4	65.2	76.5	58.2	60.1	75.0	76.3	72.5	67.9
	14	一握り	71.7	79.4	80.0	81.1	83.3	78.8	60.0	67.9	26.1	20.6	20.0	18.0	16.7	20.4	40.0	26.4
	20	いずれ飽きる	69.6	77.5	89.1	81.1	73.3	71.2	52.5	77.4	30.4	22.5	10.9	18.5	26.7	26.6	47.5	18.9

b) 調査項目

暴走族に関する文献と、M大、C大生による暴走族についての作文、レポートから、暴走族に対する様々な見方を示す項目を収集し、内容の重複を避けて、Table 1 の25項目に整理した。その内容には、1)暴走族を青年期現象として捉えようとしたもの 2)家庭環境、学校、職場、ひいては社会の仕組みそのものに問題を帰せしめようとするもの 3)個人的要因に問題を帰せしめようとするもの 4)暴走族に対する一般的印象を表わすもの 5)暴走族対策に関するもの等が含まれる。この25項目を、自分自身は肯定するか否かを、4選択肢(全然そうは思わない、どちらかといえばそうは思わない、どちらかというとそう思う、全くその通りと思う)に従って回答させた。次に、世間の人は、同じ25項目に対して、どのように回答するかを、同じ4選択肢によって推定させた。ここでは、あえて4件法にして、「どちらともいえない、わからない」という回答を認めなかった。

また、ここで用いた項目が、暴走族に対して好意的に記述したものかどうかを、a)の被験者とは別に、M大生 107人(男26、女81)に、5段階尺度(1.非

Table 3 推定された世間の人の態度

被験者ごとに肯定・否定の%を示す。 合計が100名にならぬのは無回答があったため。

Assumed attitudes of other people toward bosozoku

	項目		否定								肯定							
	番号		S高	H高	C大	M大I	M大II	短大	ジャーナリスト	主婦	S高	H高	C大	M大I	M大II	短大	ジャーナリスト	主婦
青年期	2	あこがれ	34.8	33.3	45.5	47.2	40.0	27.4	60.0	39.6	65.2	66.7	50.9	52.8	60.0	72.6	37.5	58.5
	13	つっぱり	6.5	3.9	3.6	3.9	5.0	5.1	5.0	3.8	93.5	96.1	90.9	96.1	91.7	94.5	95.0	96.2
	14	一握り	69.6	92.2	81.8	84.5	83.3	84.3	75.0	77.4	28.3	7.8	12.7	15.0	13.3	15.0	25.0	22.6
	20	いずれ飽きる	71.7	93.1	85.5	88.4	88.3	86.1	70.0	73.6	21.7	5.9	10.9	10.7	10.0	13.1	30.0	22.6
社会・家庭	1	親・甘すぎる	15.2	2.9	5.5	3.4	5.0	4.7	5.0	1.9	82.6	97.1	89.1	95.7	95.0	95.3	95.0	98.1
	4	学歴偏重	15.2	4.9	3.6	14.2	25.0	11.3	22.5	28.3	82.6	95.1	92.7	85.4	75.0	88.3	72.5	69.8
	8	居心地悪	23.9	11.8	3.6	11.6	16.7	12.8	17.5	28.3	76.1	88.2	90.9	88.0	83.3	86.5	80.0	71.7
	12	進学競争	15.2	11.8	3.6	16.3	28.3	15.7	25.0	34.0	84.8	88.2	92.7	83.3	70.0	83.2	75.0	66.0
	22	単調な生活	23.9	10.8	5.5	14.6	30.0	11.7	22.5	32.1	76.1	89.2	90.9	84.5	68.3	88.0	75.0	67.9
	24	親子の気持	21.7	15.7	9.1	17.6	18.3	13.9	20.0	11.3	78.3	84.3	87.3	82.0	80.0	85.4	77.5	86.8
	25	父・不在	8.7	2.9	3.6	6.4	5.0	6.6	17.5	11.3	89.1	97.1	92.7	93.1	91.7	93.4	82.5	88.7
個人	3	意志弱	17.4	6.9	5.5	6.4	11.7	5.1	17.5	13.2	80.4	93.1	90.9	93.1	88.3	93.8	82.5	86.8
	6	集団でなければ	4.3	1.0	3.6	4.3	6.7	2.2	7.5	7.5	95.7	98.0	92.7	94.8	91.7	97.4	92.5	92.5
	9	他人の目を意識	13.0	11.8	21.8	16.7	21.7	20.4	17.5	20.8	87.0	88.2	72.7	82.4	78.3	79.6	82.5	73.6
	17	友人がない	34.8	25.5	18.2	25.8	38.3	24.5	35.0	28.3	60.9	72.5	78.2	73.8	60.0	74.8	65.0	71.7
	23	自己中心的	10.9	0.0	0.0	1.7	6.7	0.7	12.5	0.0	89.1	100.0	96.4	97.9	91.7	99.3	87.5	98.1
一般印象	10	命知らず	19.6	7.8	7.3	9.4	20.0	5.1	35.0	18.9	80.4	92.2	89.1	90.1	78.3	94.5	65.0	81.1
	11	乱斗	6.5	3.9	3.6	3.9	11.7	3.6	17.5	22.6	91.3	96.1	92.7	96.1	86.7	96.4	80.0	77.4
	15	違反・スリル	8.7	6.9	3.6	6.4	15.0	4.7	17.5	9.4	91.3	92.2	92.7	93.6	83.3	95.3	82.5	90.6
	16	暴力団	4.3	10.8	0.0	6.9	11.7	4.7	27.5	15.1	95.7	89.2	96.4	92.7	86.7	95.3	72.5	83.0
	18	車以外の楽しみ	21.7	20.6	29.1	25.3	38.3	20.4	42.5	26.4	78.3	78.4	67.3	74.2	60.0	79.6	55.0	73.6
	19	ロック	13.0	26.5	12.7	22.3	28.3	25.2	17.5	7.5	84.8	73.5	83.6	77.3	70.0	74.1	82.5	88.7
	21	秩序無視	10.9	2.9	5.5	3.9	8.3	4.7	7.5	7.5	89.1	97.1	90.9	95.7	90.0	94.9	92.5	90.6
対策	5	取り締まれ	6.5	1.0	1.8	2.6	5.0	0.7	10.0	5.7	93.5	99.0	94.5	97.4	95.0	99.3	90.0	94.3
	7	特別視	39.1	38.2	47.3	54.5	35.0	38.3	25.0	34.0	58.7	61.8	49.1	45.5	65.0	61.7	72.5	64.2
	14	一握り	69.6	92.2	81.8	84.5	83.3	84.3	75.0	77.4	28.3	7.8	12.7	15.0	13.3	15.0	25.0	22.6
	20	いずれ飽きる	71.7	93.1	85.5	88.4	88.3	86.1	70.0	73.6	21.7	5.9	10.9	10.7	10.0	13.1	30.0	22.6

好意的　2.どちらかといえば非好意的　3.どちらでもない　4.どちらかといえば好意的　5.好意的）で評定させた。評定に基づき、各項目の好意度の平均値と標準偏差を求めた（Table 2）。平均値によって項目を次のように分類する。(F)平均値 3.5以上で、暴走族に対して好意的な記述をしている項目　(U)平均値 2.5未満で、非好意的な記述の項目　(N)平均値 2.5以上、3.5未満で、中立的な記述の項目。この分類から、(F)に該当する項目が7項、(U)が12項、(N)が6項となった。従ってM大生を評定者とするかぎり、暴走族に対して非好意的な記述が多いということになる。

2－2　結　果

(a) 被験者群別に見た暴走族への態度

概括的に見るために、4選択肢のうち、「全然そうは思わない」「どちらかといえばそう思わない」を否定的、「全くその通りと思う」「どちらかといえばそう思う」を肯定的回答とし、25項目について肯定、否定の百分率を求め、項目の内容別にTable 2，3にまとめた。

1)暴走族に対する自分自身の態度について

Table 4 は、25項目のうち好意的記述7項目、非好意的記述12項目について、肯定される度合いの平均値を、被験者群別に算出したものである。これから、ジャーナリストという特定の職業集団以外のどの被験者群も、暴走族に対して非好意的な記述文を肯定する率が好意的な記述を肯定する率より多く、暴走族に対する非好意的な態度の表われがうかがわれる。

項目の内容別に見ると、暴走族を青年期現象と見る項目については、すべての被験者群が、暴走族の行動を青少年のあこがれの的だとは考えず、青年期特有のつっぱりと見なす(Fig. 1)。暴走族は青少年のほんの一部であり、いずれ飽きてやめていくとしても、不問に付したり、そっと見守ることは出来ないというのが、被験者群に共通する回答である。しかしジャーナリストの回答は、やや緩やかである（Fig. 2）。

社会の仕組み、家庭、職場の問題に発生原因を求めようとする項目については、単調で抑圧された日常生活からの脱出である(Fig. 3)、親が甘過ぎる、親子間のコミュニケーションが欠如している、家庭も学校も職場も居心地が悪い、の4項目に対して、どの被験者群も肯定的である。しかし、父親の権威失墜の項目に関しては、それ程肯定的でない(Fig. 4)。

進学競争の落ちこぼれ組と暴走族との関係がよくとり上げられるが、脱落者の集まりだという項目に対する肯定率は低い。しかしその中でも国立大生と主婦群が比較的高い肯定率を示す(Fig. 5)。学歴偏重社会で先の見通しの暗い人という項目については、おおむね否定的だが、国立大生と主婦群は、肯定的傾向が強い。進学競争に勝ち抜いて来たと思われる国立大生のひとつの見方がうかがわれる。

暴走族の個人的要因を示す項目については多くの人が、集団でなければ何もできない人達であり(Fig. 6)、自己中心的で、他人の迷惑を顧みない、と考えている。友達がなく、孤独なのではないかという項目について、主婦、ジャーナリストは半数以上が肯定する。しかし高校生、大学の夜間部学生群では30%が肯定するにすぎない(Fig. 7)。

暴走族の一般的印象を表わす項目については、どの被験者も交通規則違反にスリルと快感を抱き、社会生活の秩序を無視しており、暴走族の仲間に入ると、やくざ等との関わりができやすいと見ているが、すぐ乱闘したり、不純異性交遊をする集団とは見なしていない(Fig. 8)。車に乗ることと、いじる以外に楽しみがない人だという記述は、主婦以外は否定的である(Fig. 9)。

暴走族対策に関する項目については、警察の力の取り締まりをすべての被験者が肯定的で、主婦の80%以上が肯定している。しかし、S高校とジャーナリストの40%近くが否定的であるのが特徴的である(Fig.10)。暴走族を特別視することが、彼等を一般社会から遊離させてしまう結果になるという項目に関しては、すべての群が肯定的であるが、遊離させる結果になるから特別視した方がよいという考えと、

Table 4　被験者群別の暴走族に対して好意的な項目を肯定する%の平均と暴走族に対して非好意的な項目を肯定する%の平均

Group-by-group averages of percentages approving of favorable comments about bosozoku and percentages approving of unfavorable statements about them

項目にあらわされる暴走族に対する好意度	項目数	被験者群							
		S高	H高	C大	M大I	M大II	短大	ジャーナリスト	主婦
非好意的（尺度値1.18～2.42）	12	57.1	63.7	66.0	61.0	57.2	61.7	53.8	75.5
好意的（尺度値3.67～4.21）	7	47.8	52.7	49.9	47.6	50.7	59.4	60.7	58.2

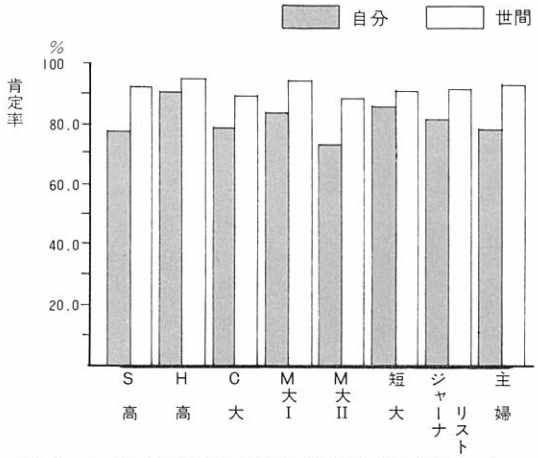

Fig. 1 No. 13暴走族の行動は青年期特有の背のびした（つっぱった）行動である
Activities of bosozoku result from their over stretching, a characteristic of adolescency.

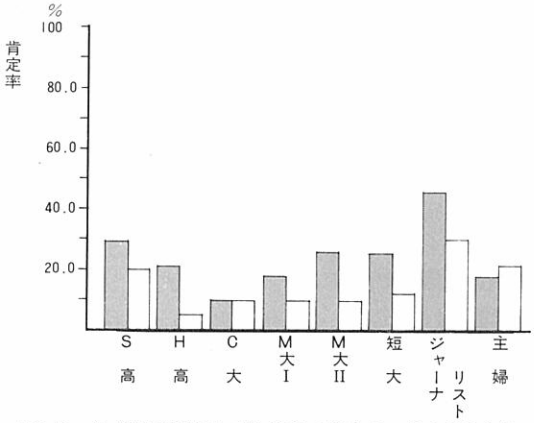

Fig. 2 No. 20暴走族はいずれ飽きてやめていくのだからそっと見守ってやればよい
We should leave bosozoku alone as they will soon get bored with what they are doing.

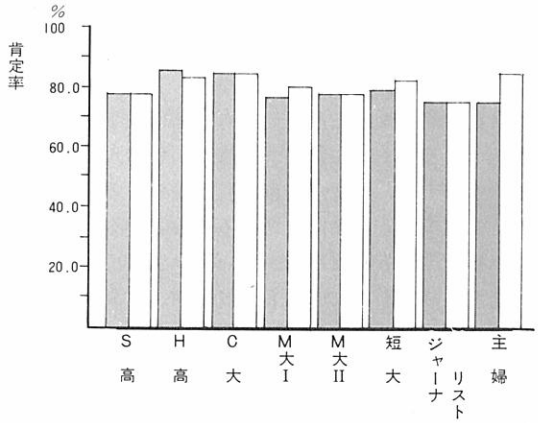

Fig. 3 No. 24暴走族の行動は日々の単調な生活や抑えつけられた生活からの脱出である
Activities of bosozoku are an escape from the monotonous or suppressed daily life.

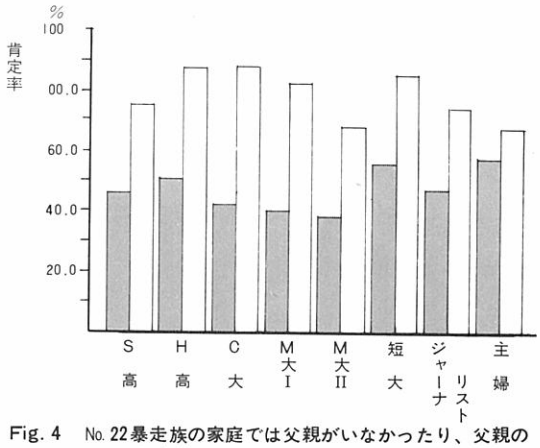

Fig. 4 No. 22暴走族の家庭では父親がいなかったり、父親の権威がなくなっている
Bosozoku either do not have a father or have a father who has lost his paternal authority.

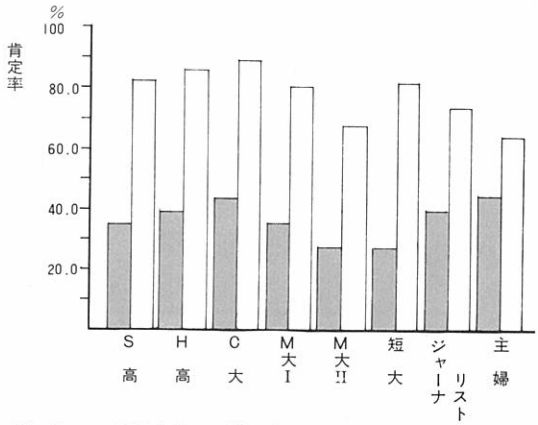

Fig. 5 No. 12暴走族は進学競争からの脱落者の集まりである
Bosozoku are groups of drop-outs from the competition for entrance examinations.

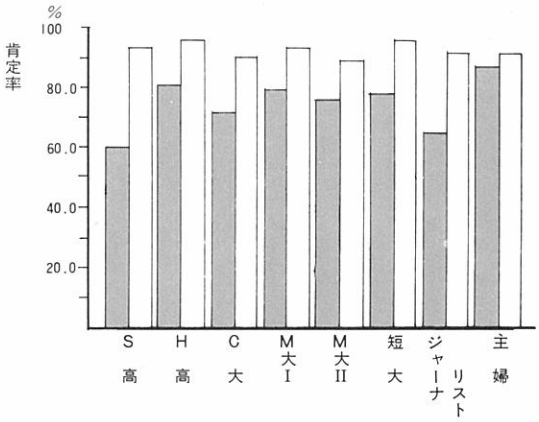

Fig. 6 No. 6 暴走族は集団でなければ何もできない人たちだと思う
I think bosozoku are a kind of people who cannot do anything unless in groups.

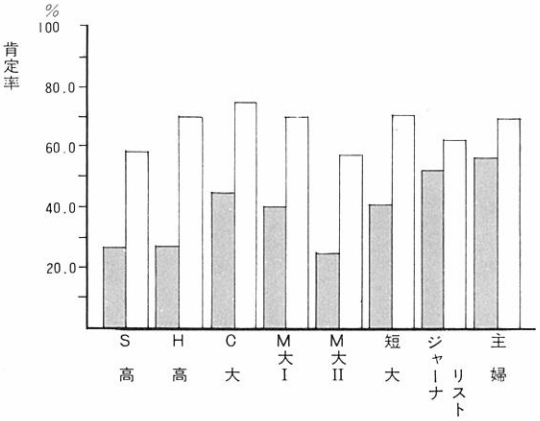

Fig. 7　No. 17暴走族は学校や職場に友だちがなく孤独である
Without friends at school or at places of work, bosozoku are lonely.

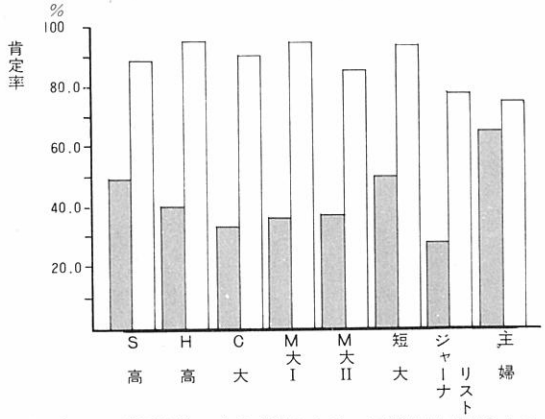

Fig. 8　No. 11暴走族はすぐ乱闘したり、不純異性交遊をする集団だと思う
I think bosozoku are groups of people who get into fights easily and engage immoral activitities.

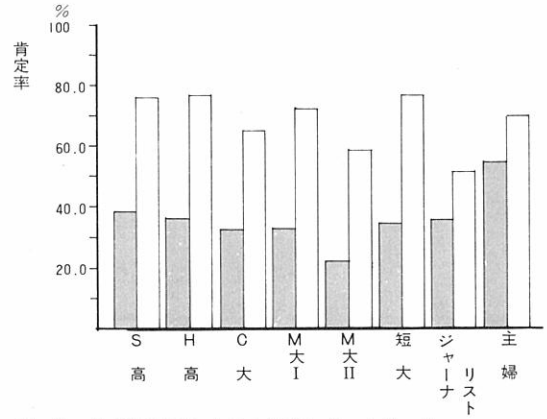

Fig. 9　No. 18暴走族になる人は車に乗ったりいじったり以外に楽しみがない人たちだ
Those who become bosozoku find pleasure in nothing but riding or playing with vehicles.

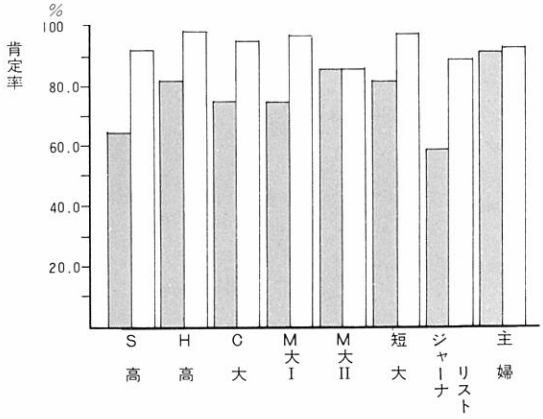

Fig. 10　No. 5暴走族などは警察の力でびしびし取り締まるべきだ
Bosozoku should be rigidly controlled by police.

遊離して騒ぎを大きくするから特別視しない方がよいとする両方の考えが、その回答には含まれるようで、曖昧な項目になったことは否めない。

被験者群を2群ずつ組み合わせ、25項目について、肯定・否定の%の分布の差の検定結果を見た。特徴的なのは、同じM学院高校でも都心部のS高校と都下のH高校の間、および、同じM大学でも昼間部と夜間部の間に、それぞれ有意差のある項目が6項あった。C国立大とM大I部とには、回答の仕方に類似が見られた。ジャーナリストとの間で有意差のある項目が少ないのはS高校である。女子短大、主婦群は、他のどの群との間にもまた両群の間にも有意差のある項目が多い。

2)推定された世間の人の態度

Table 3より、どの被験者群も、非常に似かよった推定をすることが分る。しかし、各項目について、被験者群間で推定したものの有意差検定をすると、ジャーナリストや主婦と、H高校、C国大、M大I、短大の間では、推定の仕方に有意差のある項目が多い。推定の仕方が類似している被験者群を拾い出すと、有意差のある項目が少ないという点で、H高校、C国大、M大I、女子短大、および、S高校、M大II、ジャーナリスト、主婦の2群に大きく分類することができる。

S高とH高の差異は、H高の方が25項目のうち肯定率が高く、項目14、20については否定率が高いところに、顕著である。これは、H高の方が世間の人の回答の仕方を、画一的方向に推定しており、暴走

族に対しネガティブな態度を持っているだろうと推定していることになる。

3)自分の態度と、推定された世間の人の態度との比較

Table 2 と 3 において、項目ごとに、肯定・否定の度数の差の有意性検定をしてみると、青少年のほとんどの群において、有意差のある項目が非常に多く、ジャーナリスト群や主婦群においては有意差のある項目が少ない。青少年グループでは、世間の人が暴走族に対してネガティブな見方をするだろうと推定し、自分達は、それ程ではないと回答している。

(b)暴走族との関与の程度と暴走族に対する態度について。

暴走族との関与の程度を、下記の6つの選択肢のいずれかに○をつけさせてチェックした。1.TVや新聞でみたり、人から聞いたりしただけ　2.実際に走っているのを見たことがある　3.実際に被害を受けたことがある　4.家族や友人に暴走族の人がいる　5.暴走族のいずれかのグループに属している（属したことがある）　6.暴走族と一緒に走ったことがある。

被験者は、男子439人、女子424人、計 863人である（Table 5 ）。

ここでも25項目についての肯定・否定の百分率を、それぞれの選択肢を選んだ人について求め、項目の内容別にまとめたものをTable 6 、 7 にあらわす。

1)自分の態度について

関与度が低いと考えられる選択肢1、2、3、に○をつけた人達は、非好意的な記述文をより強く肯定し、好意的な記述文に対しては、それ程肯定的でない。関与度が高いと考えられる選択肢5、6、に○をつけた人は、前記の人達とは逆の反応を見せる。4に○をつけた人はその都度異なるが、比較的後者に近い回答をしている。

項目の内容別に概観すると、関与度のちがいにより、回答に有意差が見られるのは、特に、青年期現象のあらわれとみる項目のうち、一握りだから問題にする必要はない、そっと見守ってやればよい、の項目であり(Fig.11)、社会、家庭、職場の問題に発生原因を求めようとする項目群の中では、親が甘過ぎるという項目に有意差が見られる。個人的要因に帰せしめようとする項目群では、集団でなければ何もできない人たちだという項目(Fig.12)において、また、一般印象を表わす項目群のうち、暴力団と関わりができやすいという項目(Fig.13)、さらに、暴走族対策に関する項目群では、取り締まりについての項目に有意差が見られる。

Table 5　暴走族との関与度
6つの選択肢に○をつけた度数と%※
Degrees of Involvement with bosozoku

性別	選択肢 / 度数	1	2	3	4	5	6
男	実　数	151	277	24	105	12	24
	%	34.4	63.1	5.5	23.9	2.7	5.5
女	実　数	219	235	6	49	1	9
	%	51.7	55.4	1.4	11.6	0.2	2.1
合計	実　数	370	512	30	154	13	33
	%	42.9	59.3	3.5	17.8	1.5	3.8

選択肢
1．TVや新聞でみたり、人から聞いたりしただけ
2．実際に走っているのを見たことがある
3．実際に被害を受けたことがある
4．家族や友人に暴走族の人がいる
5．暴走族のあるグループに属している(属したことがある)
6．暴走族と一緒に走ったことがある。
※1つ以上の選択肢に○をつけた人があるため、合計は100%を超える。

2)推定された世間の人の態度

暴走族への関与度の違いにより分けられた人々に世間の人の回答を推定させ、それぞれを相互に比較してみると、有意差のある項目は非常に少ない。暴走族への関与度はあまり関係がなさそうである。

3)自分の態度と、推定された世間の人の態度との関連について

Table 6 、 7 から、関与度の違う人々ごとに、各項目に対する回答の肯定・否定の度数の差の有意性検定をしてみると、ほとんどの群において有意差のある項目が多い。

以上の調査結果から特に目立つ点は、暴走族に対する自分の態度に関しては、特に女子短大生と主婦が他群と異なる傾向にあり、ジャーナリストが警察の取り締まりには否定的で、そっと見守るという意見には肯定的であることが分る。世間の見方については、被験者群間では、世間の人は暴走族に対して何らかの意見表明をするだろうとの一致した見方があるようである。自分の考えと世間の考え方との比較については、青少年のほとんどの群において両者間に差があるのに対して、大人の集団では差がないのが特徴的である。暴走族との関与度と、暴走族に対する見方との関連では、関与度の高い人と低い人とでは見方が有意に異なることが明らかにされた。

3.　暴走族青年の臨床心理学的分析

暴走族グループに属する青少年の特徴については、

実態調査のかたちでは、すでにいくつかの報告が行なわれている。しかし、深層心理学的および社会精神医学的な方法で、かなり深い精神構造や性格傾向を分析したものは僅少である。

そこで、今回は、次の仮説に立って、暴走族グループに属する青少年の特徴について、深層心理学的および社会精神医学的方法での分析を試みた。1.暴走族と呼ばれる青少年が発生するのは、彼等の道徳規範意識の発達段階、すなわち幼児的体験、育児様式に問題があるのではないか　2.思春期の心性を明確にとらえることが暴走族の発生原因、対策の手掛かりとなるのではないか　3.暴走族の集団には、いわゆる集団内部の特徴である感応現象が顕著に出ているのではないか等である。

分析を試みるために次のテスト、検査が実施された。関西の2つの公立工業高校と、ひとつの私立高校生（教師によって暴走族グループに属すると認められたものを含む）を対象に (1)ロールシャッハテスト(スイス版) (2)P・Fスタディー(Picture Frustration Study) (3)速度見越検査 (4)オートバイ運転検査（試作品） (5)SCT (Sentence Completion Test：試作品)を行なった。また栃木県内の暴走族グ

Table 6　暴走族への関与度と自分の態度
Degrees of Involvement with bosozoku and own attitudes toward them

	項目		否定						肯定					
	番号		1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
青年期	2	あこがれ	63.8	64.1	80.0	55.8	53.8	57.6	35.7	35.5	20.0	44.2	46.2	39.4
	13	つっぱり	14.1	12.9	20.0	16.2	15.4	21.2	84.6	85.9	80.0	82.5	84.6	78.8
	14	一握り	78.6	78.9	83.3	68.2	30.8	54.5	20.3	20.7	16.7	29.9	69.2	42.4
	20	いずれ飽きる	78.4	74.2	83.3	66.9	15.4	36.4	20.3	24.8	16.7	31.8	84.6	60.6
社会・家庭	1	親・甘すぎる	24.1	25.8	20.0	36.4	69.2	57.6	75.4	73.8	80.0	62.3	30.8	39.4
	4	学歴偏重	55.7	60.2	50.0	71.4	46.2	60.6	43.5	39.3	50.0	27.9	53.8	36.4
	8	居心地悪	26.8	31.8	33.3	42.9	53.8	42.4	73.0	67.8	66.7	55.8	46.2	57.6
	12	進学競争	63.5	63.1	53.3	68.8	76.9	78.8	35.9	36.5	46.7	31.2	23.1	21.2
	22	単調な生活	47.8	50.0	36.7	23.4	46.2	60.6	51.4	49.4	63.3	76.0	53.8	39.4
	24	親子の気持	17.0	18.6	26.7	20.8	7.7	18.2	81.4	80.7	73.3	79.2	92.3	81.8
	25	父・不在	13.0	18.9	13.3	24.0	38.5	21.2	86.2	80.7	86.7	75.3	61.5	78.8
個人	3	意志弱	34.3	36.1	30.0	50.0	69.2	54.5	64.9	63.1	70.0	49.4	30.8	42.4
	6	集団でなければ	19.7	20.7	3.3	33.8	53.8	54.5	80.0	79.1	96.7	65.6	46.2	42.4
	9	他人の目を意識	28.1	24.6	20.0	27.3	30.8	33.3	70.8	75.0	80.0	72.7	69.2	66.7
	17	友人がない	51.1	59.6	83.3	88.3	92.3	87.9	47.9	39.5	16.7	11.0	7.7	12.1
	23	自己中心的	13.0	14.8	6.7	25.3	30.8	39.4	85.7	84.4	93.3	74.0	69.2	60.6
一般印象	10	命知らず	52.2	54.5	46.7	68.8	69.2	63.6	47.0	44.3	53.3	30.5	30.8	36.4
	11	乱斗	43.2	47.1	36.7	57.8	61.5	72.7	56.2	52.7	63.3	42.2	38.5	27.3
	15	違反・スリル	27.7	25.2	23.3	28.6	46.2	42.4	76.8	74.4	76.7	70.1	53.8	54.5
	16	暴力団	28.4	26.8	33.3	34.4	61.5	42.4	70.5	72.3	66.7	63.6	38.5	54.5
	18	車以外の楽しみ	58.4	64.5	56.7	76.0	76.9	69.7	40.8	35.0	43.3	24.0	23.1	30.3
	19	ロック	41.9	45.7	50.0	45.5	7.7	36.4	56.8	53.1	46.7	53.9	84.6	60.6
	21	秩序無視	11.9	12.9	3.3	23.4	46.2	36.4	86.5	86.1	96.7	76.0	53.8	63.6
対策	5	取り締まれ	16.2	21.1	13.3	37.0	46.2	48.5	83.5	78.5	83.3	63.0	53.8	51.5
	7	特別視	28.1	29.3	23.3	26.6	15.4	27.3	71.4	70.1	76.7	72.1	84.6	69.7
	14	一握り	78.6	78.9	83.3	68.2	30.8	54.5	20.3	20.7	16.7	29.9	69.2	42.4
	20	いずれ飽きる	78.4	74.2	83.3	66.9	15.4	36.4	20.3	24.8	16.7	31.8	84.6	60.6

ループに、インタヴュー、ＳＣＴ、アンケート調査を行なった。関西の場合、広義の暴走族と呼ばれる生徒をＢ群、二輪車に乗っていても問題を起こしていない生徒をコントロール群(Ｃ群)、標準成人あるいは優良群（無事故、無違反の生徒）をＡ群として、比較検討した。

３－１　ロールシャッハテスト（Table 8）

Ｂ群（暴走族）20名のうち、無作為に８名、Ｃ群（コントロール群）25名のうち同様に７名を選び、テストを実施した。

全体的に対象群に比較すると、いわゆる暴走族グループの総反応数は少なく約半数であり、精神的活動は抑制的で、やや不活発で知的にも低い印象を受ける。

ＢＲＳ(Basic Rorschach Score）を見ると、その差は、はっきりと認められる。暴走族グループは、－15.75を示しており、これは、神経症の範囲を越えて、異常行動を起こしやすい精神状況にあるともいえる数値である。

またＣ、ＣＦ反応を比べると、コントロール群の方がはるかに豊かな感性を表出できる傾向が強く、それに対して暴走族グループは、感性の反応がにぶ

Table 7　暴走族への関与度と推定した世間の態度
Degrees of Involvement with bosozoku and assumed public attitudes

	項目		否定						肯定					
	番号		1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
青年期	2	あこがれ	37.6	37.5	46.7	29.2	38.5	36.4	61.9	62.1	53.3	69.5	61.5	60.6
	13	つっぱり	3.8	4.3	3.3	7.1	7.7	9.1	95.9	94.9	96.7	92.2	92.3	87.9
	14	一握り	83.2	84.0	76.7	81.2	76.9	75.8	15.7	15.0	23.3	16.9	23.1	21.2
	20	いずれ飽きる	84.3	86.3	90.0	84.4	84.6	78.8	14.3	12.3	10.0	14.3	15.4	21.2
社会・家庭	1	親・甘すぎる	3.8	4.5	0.0	3.9	23.1	15.2	95.9	94.9	100.0	94.2	76.9	81.8
	4	学歴偏重	15.1	12.5	13.3	12.3	7.7	15.2	83.8	86.7	86.7	85.7	92.3	81.8
	8	居心地悪	13.8	12.5	3.3	12.3	23.1	12.1	85.1	86.5	93.3	85.1	76.9	87.9
	12	進学競争	16.8	16.0	20.0	14.9	15.4	27.3	82.7	83.2	80.0	83.8	84.6	69.7
	22	単調な生活	15.1	15.6	13.3	14.3	23.1	24.2	84.6	83.8	86.7	83.1	76.9	72.7
	24	親子の気持	16.5	15.6	16.7	12.3	23.1	12.1	82.4	83.8	83.3	87.0	76.9	87.9
	25	父・不在	5.1	7.2	3.3	3.2	7.7	6.1	94.6	92.2	96.7	95.5	84.6	90.9
個人	3	意志弱	7.3	7.8	6.7	8.4	7.7	15.2	91.9	91.4	93.3	89.0	84.6	78.8
	6	集団でなければ	3.5	3.5	0.0	1.9	7.7	6.1	95.9	95.7	100.0	96.8	92.3	90.9
	9	他人の目を意識	19.5	17.8	13.3	9.1	0.0	15.2	79.2	82.0	86.7	89.6	100.0	81.8
	17	友人がない	25.1	25.8	16.7	29.2	46.2	39.4	73.5	73.2	83.3	68.2	53.8	60.6
	23	自己中心的	1.1	2.1	0.0	3.9	7.7	12.1	98.4	97.3	100.0	95.5	92.3	87.9
一般印象	10	命知らず	13.0	8.0	10.0	8.4	7.7	12.1	86.5	91.2	86.7	90.3	92.3	87.9
	11	乱斗	5.7	4.9	3.3	3.9	7.7	9.1	93.8	94.7	96.7	94.8	92.3	90.9
	15	違反・スリル	7.6	6.6	3.3	9.1	7.7	21.2	92.2	93.0	96.7	89.6	92.3	75.8
	16	暴力団	8.1	7.2	10.0	8.4	15.4	24.2	91.6	92.2	90.0	90.3	84.6	72.7
	18	車以外の楽しみ	24.3	24.4	23.3	21.4	15.4	21.2	74.9	74.8	76.7	77.3	84.6	75.8
	19	ロック	21.1	23.6	13.3	23.4	30.8	27.3	77.6	75.6	86.7	75.3	69.2	72.7
	21	秩序無視	3.8	5.1	3.3	6.5	7.7	12.1	95.7	94.3	96.7	92.9	92.3	87.9
対策	5	取り締まれ	2.2	2.0	0.0	3.2	7.7	12.1	97.6	97.9	100.0	96.1	92.3	87.9
	7	特別視	44.1	39.1	36.7	40.9	15.4	33.3	55.1	60.5	63.3	58.4	84.6	66.7
	14	一握り	83.2	84.0	76.7	81.2	76.9	75.8	15.7	15.0	23.3	16.9	23.1	21.2
	20	いずれ飽きる	84.3	86.3	90.0	84.4	84.6	78.8	14.3	12.3	10.0	14.3	15.4	21.2

く、神経症的な傾向が見られる。

M反応は両群とも、あまり大きな差はない。しかし、FM＋m反応では暴走族の出現率が高く、葛藤、緊張、不安の特徴がはっきり出ており、質的に悪い空想を抱き、非行に傾きやすい素地が推察される。

以上の特徴が認められるものの、A％を比較すると、差がほとんど認められないことから、異常行動にすぐ結びつくとは思われない。

また、その他の特徴として、H反応から、暴走族グループは本質的には、人間以外のものに関心、興味がむけられていることも観察された。

Aa反応などを中心に分析すると、暴走族グループの出現が多く、精神分析学的には、やや退行的で、幼児期の母親との接触に問題があると予想され、歪曲された形で、行動面に出てくるのであろうことが推察される。

3－2　P・Fスタディー（絵画欲求不満テスト）

P・Fスタディーの日本版、成人用（三京房）をB群（暴走族）18名、C群（コントロール群）14名に実施した（Table 9）。

GCR(Group Conformity Rating)では、B、C群ともに標準値より低い。この標準値は高校生から成人についての平均値なので高校生の値が低くなるのはやむを得ないであろう。B、C群を比較すると、B群の方が得点は高く、集団順応度が高い傾向にあることが注目される。

プロフィール欄のE、I、M、O－D、E－D、N－Pの数値を、標準値と比較すると、B、C両群ともに、非妥協的で、欲求不満の原因を他人とか環境のせいにする他罰的な傾向が見られ、敵意を外に向け、自我を強調する傾向がある。

超自我因子欄のE、I、E＋I、E－E、M＋Iからは、両群とも、自我を主張するが、積極的に自分を守れず、幼稚な攻撃性をそなえているという、社会性、精神発達性の未熟性を示す傾向が分かる。

P・Fスタディーの結果を全体的に見ると、標準値（成人）とB、C群（高校生）の間には有意差が見られるが、BとC間には、GCRの得点のみB群が高いという示唆傾向以外には、有意の差は見られなかった。

関与度別にみた自分についてと世間の人についての肯定的回答の比較
Comparison of positive replies regarding own and assumed public attitudes by degrees of involvement with bosozoku

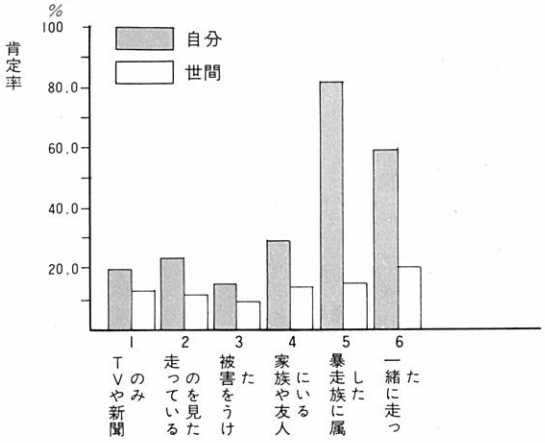

Fig. 11　No. 20暴走族はいずれ飽きてやめていくのだからそれを見守ってやればよい
We should leave bosozoku alone as they will soon get bored with what they are doing.

Table 8　ロールシャッハテストの結果
Results of rorschach test

（注）上段の数字は$\bar{X}$、下段の数字はSD
(Figures in upper row $\bar{X}$, figures in lower row SD)

	修正 BRS	R	Rej	T	T/R	T/R1	non Color	Color	Delayed	Dislike	W：D	Dm	S	W-D-Dd-S	W：M	ΣC：M
Ⓐ標準値	適応 15～35 コンフリクト 0～15 欠陥 －15～0 現実喪失－40～－15	20～45	0			30以下									3：1 M＝3以上	
Ⓑ暴走族（n＝8）	－15.75 7.01	22.62 6.59	0	953.62 540.72	82.57 51.77	17.88 15.56	13.70 10.85	20.72 21.61	50.75 54.18	0	16.00：6.00 6.28：3.31	2.62 3.42	0.50 1.32	W＝7 D＝1	16.12：1.37 6.22：1.87	2.25：1.37 1.53：1.87
Ⓒ対照群（n＝7）	－ 5.00 9.78	39.57 12.80	0	1315.28 596.10	131.71 59.35	16.77 9.84	15.20 8.90	18.08 11.24	38.85 21.68	0	25.00：12.21 11.85：5.95	2.62 2.76	1.57 1.84	W＝6 D＝1	25.42：2.00 12.13：1.87	4.17：1.92 1.85：1.83
Ⓑ～Ⓒ t値	※※ 5.510	※※ 3.055		1.147	＋ 1.594	0.151	0.270	0.271	0.507		(W) ＋ 1.740 (D) ※ 2.362	0	1.215		(W) ＋ 1.770 (M) 0.606	(ΣC) ＋ 2.047 (M) 0.534

※※1％水準で有意差あり　※ 5％水準で有意差あり　＋ 示唆傾向（0.05＜P＜0.2）

Table 9　P・Fスタディー
P.F.Study

(a) GCR　(b) プロフィール欄　(c) 超自我因子欄
(注) 上段の数字はX̄、下段の数字はSDで、数字はいずれも%を示す

	GCR	E	I	M	O-D	E-D	N-P	E	I	E+I	E−E	I−I	M+I
Ⓐ 標準値	58.2	40.3	27.0	33.1	24.8	51.3	23.1	4.7	7.0	11.7	18.6	7.5	40.6
(n=1100)	12.3	13.1	7.92	9.7	9.6	10.0	11.3	3.2	4.8	5.3	11.7	4.7	9.87
Ⓑ 暴走族	53.33	44.00	28.88	27.16	14.11	58.66	27.27	1.33	3.83	5.22	27.16	8.88	31.00
(n=18)	13.82	15.70	12.15	8.49	5.42	13.89	11.91	2.60	3.13	4.27	17.10	5.98	8.57
Ⓒ 対照群	45.42	47.71	27.21	25.14	14.42	57.35	28.35	1.07	3.28	4.42	31.57	6.71	28.28
(n=14)	14.23	20.69	10.60	11.33	7.69	12.56	10.78	1.79	2.87	3.00	16.78	2.69	11.35
(A〜B) t値	+ 1.662	1.184	0.987	※ 2.579	※※ 4.707	※※ 3.072	+ 1.550	※※ 4.440	※※ 2.790	※※ 5.155	※※ 3.048	1.229	※※ 4.097
(B〜C) t値	+ 1.535	0.558	0.394	0.558	0.129	0.267	0.257	0.310	0.495	0.577	0.707	1.222	0.748

※※　1%水準で有意差あり　※　5%水準で有意差あり　+　示唆傾向 (0.05＜P＜0.2)

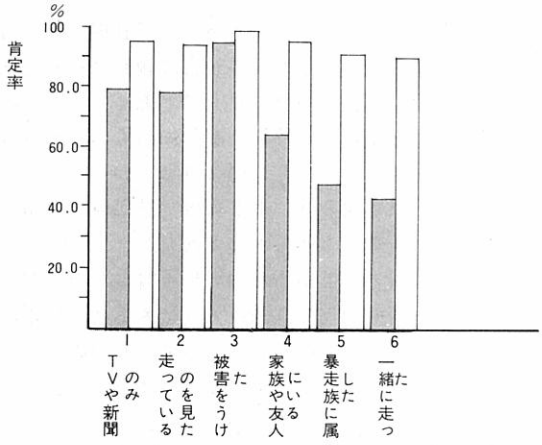

Fig. 12　No. 6 暴走族は集団でなければ何もできない人たちだと思う
I think bosozoku are a kind of people who cannot do anything unless in groups.

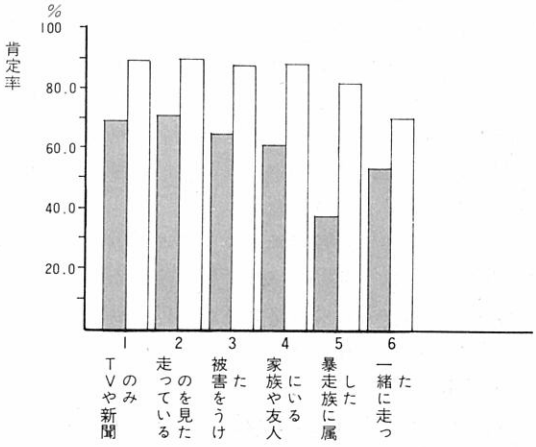

Fig. 13　No. 16暴走族の仲間に入ると暴力団、やくざと関わりができやすい
When youths join bosozoku, they tend to have relations with hoodlums and gangsters.

Fc+c+C' : FM+m	Ⅷ+Ⅸ+Ⅹ / R	(H+A) : (Hd+Ad)	F : (FK+Fc)	FC : (CF+C)	FC+CF+C / Fc+c+C'	FM : M	F% / neW F%	F+% / new F+%	A%	P(%)	Contend Range
				FC＞CF+C	2 : 1		25〜55 / 80以上	70以上	25〜45	4か5以上	
2.12 : 1.12 1.52 : 1.05	30.37 5.00	10.00 : 4.87 3.08 : 1.91	15.87 : 0.43 7.48 : 0.46	0.50 : 1.37 0.50 : 0.74	1.87 : 1.75 0.90 : 1.61	0.62 : 1.37 0.86 : 1.87	64.00/82.25 14.64/15.40	81.62/85.25 11.10/12.44	40.50 10.82	5.25(25.62) 1.58(11.96)	7.37 1.88
1.42 : 3.42 1.30 : 3.01	36.14 7.84	16.57 : 4.42 7.19 : 3.70	25.71 : 2.00 10.25 : 1.50	0.85 : 3.64 0.83 : 2.12	4.50 : 1.85 1.83 : 1.81	2.42 : 1.92 2.63 : 1.83	63.00/82.57 11.52/13.98	84.42/77.14 13.91/25.32	38.57 9.49	6.85(18.85) 1.58(5.10)	9.00 2.61
(Fc+c+C') 0.885 (FM+m) + 1.885	+ 1.601	(H+A) ※ 2.188 (Hd+Ad) 0.280	+ (F) 1.993 (FK+Fc) 2.621 ※	(FC)0.933 (CF+C) 2.489 ※	FC+CF+C 3.350 ※ Fc+c+C' 0.105	(FM) + 1.701 (M) 0.534	(F%) 0.136 (new F%) 0.039	(F+%) ※ 2.480 (new F+%) 0.747	0.349	+ 1.820 (1.295)	1.303

3－3　速度見越検査（竹井機器）

この検査は、一定の水平直線軌道を、一定の速さで右から左に移動する光点を追従視させながら、ある時点でこれを遮蔽して、その光点が通過すると思われる客観的な時点を主観的に判断させるもので、事故者は明らかに主観的タイミングが速まる傾向を示すといわれている。この検査結果では、B、C群間には有意差はなかった。

3－4　オートバイ運転検査（試作品）

A群29名、B群20名、C群25名に検査を実施した結果がTable 10である。

敏捷性と正確さ（1A、1B）では、AとB、C群間に有意差があり、A群は、動作の速さ、質の点でB、C群より優れる。安全知識(2)では、B、C群間に有意差があり、B群には、正しい安全知識に欠けるものが多い。運転技能では、有意差はない。性格面を表わす、自己統制力(4)、社会成熟度(7)、興奮性(5)のスコアからは、B群は、A、C群に有意に劣り、自己統制力に欠け、興奮性が高く、社会成熟度が低い傾向が見られる。運転の態度、および健康でも、B群は他両群よりも有意に悪い。

1～8までの設問でチェックされた数によって青（0個）：良好　黄（1～2）：要注意　赤（3～）：充分注意　のいずれかに判定される総合判定の結果では、B群には、良好と判定されるものは1人もいない（Table11）。

3－5　SCT（文章完成法テスト：試作品）

Table 12に見られるように、オートバイは……、スピードは……、事故は……の刺激語に対する答は、A、B群によってその差が明らかであり、B群の無謀な態度が顕著である（この節の研究に際し、特に大阪教育大学松岡弘 助教授に多大の御支援を頂いた）。

栃木県の暴走族グループに属する青年を対象にしたSCTの分析結果は次のとおりである。

「父親」の刺激語に対しては、父親ぐらい話がわからない人はいないと反応し、これはいかに父親との断絶が激しいかを物語っている。これに対して、「母親」は、よく話を聞いてくれると見ており、甘やかされている傾向が浮き彫りにされた。なお、母親に対して、アンビヴァレントな感性をもつ反応も目立った。

「私の好きなのは」に対しては、車にのってどこかへ行くことであると反応しており、暴走族の車好きが顕著であることがうかがわれる。しかも、気のあった仲間と楽しむことであるという反応も注目できる。

「この頃私は」では、思うことと、行動が違ってしまうことが多いという反応があり、思春期心性の特徴を表わしている。しかし、社会で嫌われない人間になりたいとか、悪い友達をもつと悪くなると反応していることから、意外に素直な傾向もみとめられ、また自分自身についても、嫌な点は、つまらない人間だからと反応する等、ある程度、自己概念も確立し始めていることも明らかにされた。

「きらいなのは」、本当は弱い男と自覚した時だと反応し、虚栄的な反面、弱い人間であることを正直に示している。自分の家庭についての反応からは、青少年の家族は決して、平和な家庭ではなく、悲しい歴史を秘めていることが予想された。

「女の人」は、男にみられようと、せいいっぱい着飾っていると反応している。これを精神分析的に解釈すると、彼等の深層心理のなかに女性化する心理構造がひそんでいるのではないかと考えられた。

以上のいくつかのテスト、検査等の分析結果によ

Table 10　オートバイ運転検査（下位問題の得点）
（注）上段の数字は$\bar{X}$、下段の数字はSD
Motorcycle Driving Test　(Scores on various questions below)

	1A	1B	2	3	4	5	6	7	8	9	総合
Ⓐ 優良群	6.39	5.85	7.34	6.86	3.10	3.48	3.69	3.33	0.65	0.79	0.65
(n=29)	1.15	1.74	0.80	0.60	2.40	1.65	2.78	1.80	0.91	0.71	0.66
Ⓑ 暴走族	4.95	3.20	6.10	6.50	6.80	4.25	8.78	5.27	2.20	0.80	3.45
(n=20)	1.20	1.53	0.76	0.92	1.83	1.51	2.65	1.22	1.80	0.74	1.56
Ⓒ 対照群	4.32	3.24	6.92	6.80	5.40	3.56	6.77	4.36	1.45	1.04	1.92
(n=25)	1.43	1.45	1.28	1.01	2.74	1.70	3.34	1.62	1.33	0.87	1.35
(A－B)t値	※※ 4.138	※※ 5.386	※※ 5.345	+ 1.629	※※ 5.701	+ 1.628	※※ 6.292	※※ 4.119	※※ 3.225	0.047	※※ 8.436
(B－C)t値	+ 1.537	-0.09	※ -2.47	-1.00	+ 1.92	+ 1.38	※ 2.14	※ 2.04	+ 1.90	0.98	※※ 3.42

※※　1％水準で有意差あり　　※　5％水準で有意差あり　　＋示唆傾向（0.05＜P＜0.2）

Table 11　総合判定の結果
Results of overall evaluation　(%)

	A 群	B 群	C 群
青	44.8	0	16.0
黄	55.2	30.0	48.0
赤	0	70.0	36.0
人 数	29人	20人	25人

り、暴走族グループの青少年の深層心理の特徴がある程度明らかにされた。彼等がなぜ暴走族に属するようになったか、その背景と原因を明らかにし、彼等への対応策を考えていくために、もう少し幅広く思春期の青年の心性を把握し、それが何故危機的な様相を呈するのかを考えてみたい。そうすることにより、さらに暴走族の青年の特徴を明確にすることができるのではないかと思われる。

現代は「父親なき社会」ともいわれる。現代の若者は、いわゆる超自我の訓練が不足しているので、簡単に危機状況におちいりやすく、また、わがままで自己中心的であるために動揺しやすい。特に理想とそれ相当の能力が伴わない若者の場合は容易に葛藤状態をおこしやすい。これは父親との接触が少なく、父親との同一視がうまく成立せず、母親に依存したかたちのまま、自我の成熟はきわめて弱い形で成人になると予想される。

このような精神構造をもつ思春期の若者は、自分で自分の意志決定をすることが全く不可能であることが明らかにされてきている。

一方、欲求を刺激する傾向は、ますます増大し、知識、技術を身につけないまま成人となっていく若者は、基本的に心の動揺をしずめる方法がなく、さらに、知識中心で人間的触れ合いに欠ける現在の学校教育が、彼等の心の混乱や疎外感を増長させるため教育上落ちこぼれざるを得なくなっている。こうしたドロップアウトの若者は増加し、仲間を作り、自分達の生活を守るために特殊な集団を作ろうとする。

しかし、このような状態の中で、勉学やスポーツに励み、定全運転にも努力している若者もいる。彼等と暴走族グループに属する若者とには、どんな差があるのであろうか。前述したいくつかのテスト、検査の例から、またこれまでなされたその他の調査から、次のようにいえよう。暴走族グループの若者の資質について、主として心理学的立場からいうと、知能程度はＩＱ90～116程度の普通域に入るか、あるいはこれを少し下まわる程度のものが多い。一般の非行少年に比べて、知能レベルが高いことは周知のとおりだが、一般の高校生と比較すると、知能および学力の点で著しく低い方へ傾斜している。したがって、学習意欲に欠け、欠席、怠休が多く、学習不適応現象をおこしているものが多い。

性格面では、超自我が弱く、我慢できない。不安定、被暗示的、追従的、倦怠、無感動、また、自立と依存、自己主張と自己防衛、独善と絶望、反抗と尊敬、孤独へのあこがれと集団への所属欲等、常に反意語の連結するアンビヴァレンツの状態にあり、軽い躁状態になりやすい性格傾向が認められ、自己顕示的で短絡反応を起こしやすい。このような性格が社会では、社会的あるいは道徳的規範に欠けるというかたちでとらえられることになる。

以上の諸点から観察される暴走族グループの若者の特徴は、先に述べた思春期の心性が、かなり危機的な様相を呈したものと推定される。では、それは何故か。その原因を探ってみることにする。

a）独立が早すぎる

全体として、身体の成熟に刺激され、早くから成人になったつもりで家族から独立し、社会に触れる。そこには何かの手段で、無理のない成熟と独立が成

〔Table 12〕 S・C・T
Sentence Completion Test

オートバイは……の項目
"A motorcycle....."

Ⓐ 優良群（N＝14）	Ⓑ 暴走族（N＝18）
○便利で楽しい	○自分の足
○気を付けてのろう	○走るもの
○乗り方によってはおそろしい	○友だちだ
○安全運転でのろう	○のって楽しむ
○あぶない	○スピードを出す
○事故を起こすもの	○スリルがある
○走るきょうき（凶器）	○とばすだけではつまらない
○危険な機械	○スピードが出てきもちがいい

スピードは……の項
"Speed....."

Ⓐ 優良群（N＝14）	Ⓑ 暴走族（N＝18）
○出しすぎると危険である	○出して楽しむものである
○ひかえめに	○気分がスーとする
○事故のもと	○出ると気持ちがいい
○適当に	○快感を感じる
○恐い	○出せるだけ出したい
○スリルがあるが恐い	○出せば危い、でもとばしたい
○人を殺させる	○痛快なもの

事故は……の項目
"An accident....."

Ⓐ 優良群（N＝14）	Ⓑ 暴走族（N＝18）
○恐い	○恐いが他人がおこした事故はおもしろい
○自分をだめにする	○おこるものである
○おこしてはいけない	○したくない
○人の生命をうばう	○いつおこるかわからない
○気のゆるみからおこる	○いたい
○不幸をまねく	

立していく方策が必要である。

b）フラストレーションによる逃避

進学はもちろん欲望の満足の点でも思うようにならないことから起こるフラストレーションをたちまち回避して、別な方向に逃避する。それが暴走族グループ形成のきっかけとなる。

c)無謀さ、社会への好奇心、冒険心が、集団化によって、大胆化する。その心性には、英雄きどり、反抗心、虚栄心等の欲望がある。

d）知的解決の困難さとまずさ

知的に問題を解決できないために、情緒的感性的にことを処理しようとする。話し合いも冷静さを欠き、抗争的となる。グループ間の衝突は、きわめて衝動的な行為とみられている。

e）ドロップアウトされたという意識

平均的社会から押し出され、何か別の社会に出されてしまったという心性をもっているため、ルールを守り、社会の規準にそって行動するという考え方が基本的に混乱している。

f）社会的に認められるかたちで欲望が満足できない

これは、もっとも厳しい若者の現実で、抑圧されるすべてのことに、このメカニズムが表われる。

g）自己認知の不足

当然のことであるが、若者は自分の周囲の状況や、自己のあるべき姿を自分で統制できない。

h）現実吟味の低さ

現実を吟味する力が、ほとんど確立されていないので、感情的、衝動的で、ついに犯罪へと傾斜していく。

こうして若者の心性は、瞬間的な快楽感を求めて刹那的となり、暴力化し、抗争化し、スピードに挑戦し、軽犯罪行動を繰り返し、非行におちいっていく。また、学校への嫌悪感、両親、社会に対する不満、反発が重なると、それらに対して復讐してやろうとする傾向が強まる。周囲の仲間の刺激や誘惑に耐えうる自我の形成がなされていないので、簡単に暴走族化していくものと考えられる。さらに、現代社会は、リースマンの指摘するように真のリーダーがかげをひそめ、孤独な大衆社会となってしまった。しかし、日本的な社会構造はそれと共に独特のタテ社会であり、逆に強力なリーダーを求めて暴走族グループに参加していく場合も多いといえよう。

4. 暴走族青年に関する社会精神医学的考察

思春期の特徴を踏まえた上で、ここでは、感応現象という問題を中心にして、現代の日本社会がどのような社会であり、なぜ暴走族が発生するのかを、社会精神医学的に考察してみたい。

今回の調査で、暴走族の発生地域の特質を栃木県の場合で見てみると、彼等の出身地、生活圏は、人口密集地区には意外と少なく、周辺地域に存在するものが圧倒的に多かった。その要因のひとつは、都市中心部の青年が耐性を身につけているからではなく、車以外の手段でフラストレーションを解消できることを示唆している。それに対し、周辺部は農村地帯が多く、生活圏が閉鎖的・封建的であり、満足できるレクリエーションがみあたらない。

このような、抑圧されやすい閉鎖的な社会環境の中では、フラストレーションの強い若者達は、互いに影響されやすく、暗示にかかりやすく、感染しやすい。いわゆる感応し合うことにより、連帯性を求め、グループ行動によって、発散の場を探し求めることは容易に理解される。現代社会では、車がこの発散行動の手段となる。

貧困、差別等の閉鎖的環境において、このような感応現象が起こると人々には孤独、相互不信、しっと、羨望等の精神的特性が見られるようになる。そして、人々は、外界から威嚇されると感じやすく、被害的で、不全感をもちやすくなる。従って、自分より強い者や仲間に依存し、自分の危機的状況からの救済を求める。特に、未熟で甘えやすい性格の青少年は、不信と不安がつのると、強烈な攻撃に変わる。この感応現象は、同じ境遇にある人々に次々と感染してゆく。それは集団ヒステリーであり、暴走族グループの構造には、その特徴がはっきりと見られる。感応する側の人間は、年上で、積極的、闘争的、独善的で、逆に感応される側は、年下で消極的、依存的、被暗示性に富む。暴走族グループ化する集団の構成には、必ずこのようなサド・マゾヒスティックな関わりが存在しているとみられる。このような現象は、経済の変動、不況、文化的ショックのような社会変化によって助長されることから見ても、まさに社会の病種として捉えていく必要があると思われる。

それでは、このような日本の社会で、どのように暴走族が成立していくのであろうかを考察してみたい。

進学競争の結果、青少年が、大きく、XとYグループに分けられ、Yグループの青少年と暴走族と関連がきわめて深いことは周知のことである。Yグループ＝暴走族とは必ずしも断定できない点は、今後

の研究課題のひとつであるが、一般的に、暴走族に参加する青少年は、中、高校生の場合、成績が下位のため、進学をあきらめなければならず、やむを得ず就職組に入ったものが多い。社会人の場合は、単純労働者が多く、社会的地位では下位に属するものが大部分である。進学競争や競争社会からドロップアウトした彼等のアウトローとしての意識は根深く、成績上位者、社会的エリート達に対する劣等感や敗北感、また自己実現が阻まれてきたことに対する欲求不満と焦そうの慮になっている。従って、心の奥底で、エリートや権威に反抗し、自己の力を、できればカッコよく誇示する「場」を求める。このフラストレーションを補償するものが〝車〟であり、同じ境遇にあるものとの〝連帯性〟である。〝暴走族〟になることにより、抑圧的な日常的「生」を脱出し、一種の「祭」の世界、すなわちオルギー(狂宴乱舞)、エクスタービ(恍惚状態)に陥る。精神病理学でいう「カタルシス」作用に似ている。このようにカタルシスを行なうことにより、自らの心の渇きを癒すと考えらる。

5. 暴走族の最近の現状

5－1 栃木県

2輪暴走族9、4輪暴走族34、混合暴走族6で不明20となっている。今年に入ってから、600名程度に減少し、もっとも多かった時期にくらべると約半分となっている。暴走族のリーダーもほとんど21歳から24歳にしぼられて、それほど、高年齢ではない。メンバーの平均も19歳である。他県にくらべて、暴力団との関係はあまりない。

週2回集合場所がきまっており、制服をきて喫茶店などにあらわれる。幹部リーダーは高校中退などのメンバーで、いわゆる平会員は高校生、中学生、工員、農業に従事するものが主である。

ときどきガソリンがほしいために恐喝したり女子高校生などとシンナーあそびなどをしている。

主な事件の内容をひろって問題となる点をあげてみると次のようなものである。

暴走族の会員となると入会金を徴収するが、その入会金をおさめないために、脱会しようとすると、かなりはげしく幹部は脅したりする。

また栃木県内の暴走族は、他県の暴走族に対抗するため、連合組織化をはかり、日光附近で、おそいかかったりした。その他現金をおどしとったり、仲間に入らない場合には乱暴を働き、同様に現金をうばいとったりする。

このように恐喝、暴行、スリなどの軽犯罪をともない、連合組織化をはかり、対立抗争を主目的にした暴走族行動が目立つようになった。

5－2 集団不純異性交遊事件：山梨県

甲府市のA高校で起こったこの事件は、直接暴走族が関与したものではない。しかし、暴走族およびYグループと、Xグループとは質的にかなり違う世界や行動パターンがあると予想され、中でも、女性との関係は年齢的に重要な意味を持ち、暴走族へ走る要因とも考えられる。その意味で調査した事件のあらましと問題点を紹介する。

同種の事件はほとんど全国的に発生しており、これはその一例である。警察、家庭裁判所、教育委員会から事情を聴取した結果、そういう事件が存在した、相手が社会人で売春ではない、その生徒達は特に成績が悪くない、女性が必ずしも被害者とはいえない、下校途中の短時間のできごとである、等が分かった。

この高校は市内でも中流であり、その生徒の成績も中ということを考慮すれば、彼女達をYグループとして分類はしかねる。しかし、同市の進学高校には、警察が取り扱った同種の事件はなかった。

A高校と類似のB高校の女生徒5名と座談した結果、この種の出来事は事件にならないだけでB校にもあり、また進学高校にも全くない訳ではない。そして女生徒が、一般的に男性との接触を期待していることが分かった。このような事件に対する一般的な意見を知るために、幅広い層の男性、女性にアンケート調査をしたところ、男女、年齢を問わず上記の行為は不自然ではないという回答がほとんどであった。結果を総合すると次の通り。

1) 女性の変化がみられるが、それはモラルの変化であり、しかも、それはかなり表面的なものである。

2) 女性はX、Yグループと明確にわけることはできず、男性にはみられぬZグループともいうべき層が存在する。男性と女性とでは結婚の受けとめ方が違うからであろう。

3) A高校の事件はそのZグループによるものであり、女性のYグループの行動パターンは調査していないが、スケバンといわれるような女子高校生の行動との相関が高いようである。

4) 暴走族と関係のある女性は、暴走族からの聴取をもとにして判断すると、かなり幅広い層の女性であるが、Yグループ的、スケバン的な女性が多いよ

うである。

5)　現代の青少年の変化は、Y、Xグループの分極化のほかに女性の変化とそれに伴う男性の変化などがからみあったものとしてとらえなければならない。

6. 暴走族対策および展望

これまで、暴走族に対しては、警察当局の規制、つまり行政サイドからの指導や取り締まりが主であった。確かに周囲の人々に精神的あるいは身体的な悪影響を及ぼすいわば「事例」化するケースに対しては、取り締まりを強化する必要があろう。しかしこのような対応の仕方は、〝対症療法〟にすぎず、問題の本質的な解決には至らない。たとえば、一つの対応策としてオートバイの全面禁止を打ち出す高校もあるが、これは一方で、良き市民性を育成する運転者教育を否定し、他方で代償としてのシンナー遊びや性的非行を増加させるかもしれない。実際には、取り締まり強化後、事件が増えているところもあり、小排気量の2輪車に乗り換えているだけで精神は変わっていないという事実もある。しかし逆に取り締まり強化がなかったとしても、自然消滅することはないであろうし、いわゆる健全な車愛好青年に変質することもなく、かえって、何らかの形で社会が反応するまでエスカレートしていくであろうことが推測される。それでは暴走族の発生を防ぐにはどうしたらよいのであろうか。

多くの識者は、暴走族は家庭や学校教育の歪みによって生れると考える。たしかに、価値の多様化、都市化、核家族化、市民意識の連帯性の欠如等が進みつつある高度産業大衆社会の中で、両親の共稼ぎによる子供への無関心とか受験戦争等が現在の若者の心を荒廃させている。しかし、日本全体が、学歴社会であり、競争社会である以上、表面的な教育制度や家庭での両親の役割を変更してみても、本質的な改革にはならない。むしろ、親や教師達が彼等に対して、人間の価値は、知能の優劣、学業成績、社会的地位、富の多寡等によって決定されるのではなく、各自の適性や能力に応じて、自己実現の場を見出し精一杯生きることにあることを教え導くよう努力することが、まず必要不可欠であろう。そして、具体的にはオートバイあるいは車を取り上げるのではなく、生徒の健康管理に充分注意しながら、納得のいく科学的な方法で、技術、安全を、また公徳心についての指導を積極的に教育の中に取り入れていくことが必要であろう。車への惑溺性を彼等から取り去ることができないとすれば、周囲の人に悪影響を及ぼす行動を取らない質の良いグループに変質させる努力をするということも考慮させなければならない。また一方で、若者の余暇利用の本質を見極め、車への興味に代わる他の余暇利用が促進される環境作りがなされるべきであろう。

これらの諸策が、行政指導の下に、学校、企業の協力により実施されれば、少なくとも、学校あるいは企業に属する暴走族の数をかなり減らすことができると予想される。しかしそれでも残る〝暴走族〟の青年に対しては取り締まり強化による厳罰処理で対処することもやむを得ないであろう。〝暴走族〟の青年各々の状況に応じたきめ細かい対策が必要である。

そのために、いまだに推測の域を出ていない〝暴走族〟の発生原因を、彼等の実態把握をさらに続行し、また〝暴走族〟に属さない青少年の実態把握、および〝暴走族〟との関連性を明確にすることによりつきつめていくことが、今後の一つの研究課題であろう。

大人達によって、暴走族といわれる青少年達の生き生きとして動ける「場」が提供されるならば、抑圧されたストレスをあえて〝暴走族〟という「祭」によってカタルシスし、自らの〝傷〟を癒そうとする、いわば歪んだ心の軌跡もおのずから修正されてゆくのではないだろうか。彼等が存在できる「場」、あるいは現在の状況から抜け出すための出口がなければ、またそこから飛び出した彼等を受け入れる態勢が用意されなければ、いくら取り締まりを強化しても〝暴走族〟はなくならないであろう。

参考文献

1) 千葉康則編：暴走族－進学競争の裏側で－、日経新書、東京、1974.
2) 樋口幸吉：青春期の異常心理、異常心理学講座第4部、みすず書房、東京、1967.
3) Debesse, M：L'adolescence. Presses Universitaires de France, Paris, 1956（吉倉範光訳：青年期、白水社、東京、1964）.
4) Erikson, E：Identity, W. W. Norton, N, Y., 1950（岩瀬庸理訳：アイデンティティ、金沢文庫、東京、1973）.
5) Gedsattel, V. E. V.：Reifungskrisen in Psychoseform. Zbl. Neur. Psychiat., 130：9, 1954.
6) Healy, W他：New light on deliguency and its treatment. Yale University Press, U. S. A., 1936（樋口幸吉訳：非行少年、みすず書房、東京、1975）.
7) 石川義博：少年非行、現代精神医学大系　24：362－371、中山書店、東京、1976.
8) Kulenkampff, C.：Zurklinik der krise, Zbl. Neur. Psychiat., 130：8, 1954.
9) 宮本忠雄：危機としての神経症、言語と妄想－危機意識の病理－、平凡社、東京、1974.
10) Meyer, J. E.：Reifungskrisen der Adoleszenz, ihre Entstehungsbedingungen und ihre Prognose. Arch. f. Psychiat. u. Zeitsch. f. d. ges. Neurol., 203：235, 1962.

11) 西田博文：青年期神経症の時代時変遷、児童精神医学とその近接領域、9：225, 1968.
12) 西田博文：児童期心性とその病理、追加討論、児童精神医学とその近接領域、10：150, 1969.
13) 西田博文：思春期の感応現象について。精神医学、16：39, 1974.
14) 清水将之：高校不登校者における危機的状況、児童精神医学とその近接領域、10：11, 1969.
15) 清水将之：思春期は危機的であるか、思春期精神医学、金原出版㈱、東京、1972.
16) 清水将之：頼藤和寛：青春期危機について（その1）－文献的展望と予備的考察－、精神医学、18：145, 1976.
17) Stern, W.：Anfanqe der Reifezeit. Quelleund Meyer, Leipzig, 1927.
18) 辻　悟：思春期の精神医学的問題点とその対策、臨床科学、5：488, 1969.
19) 植元行男：思春期のもつ精神病理学的意味－いわゆる正常危機について－児童精神医学とその近接領域、9：51, 1968.
20) 油井邦雄：思春期危機として経過した家庭内問題少年の一例、臨床精神医学、4：1489, 1975.
21) Winkler, W.T.：Krisensituation Shizophrenie. Nervenazt, 25：500, 1954.
22) Zutt, J.：Der Lebensweg als Bild der Geschitlichkeit. Über Krisen auf dem Lebensweg. Zbl. Neur. Psychiat. 130：8, 1954.
23) Zutt, J. Der Lebensweg als Bild der Geschichtlichkeit. Über krisen auf dem Lebensweg. Nerrenarzt, 25：426, 1954.
24) 榎本　稔：家族変動とその異常－家庭内乱暴少年をめぐって－、家族変動の社会学、培風館、東京、1973.
25) 兼頭吉市：暴走族の病理――高校生暴走族の実態にふれて「生徒指導」 p.p.14～26, 1975, 8.
26) 兼頭吉市：暴走族と青少年問題(2)「国際交通安全学会誌」Vol.1 No.2, 1975.
27) 長岡利貞：高校生の運転行動の理解――思春期の危機との関連で「生徒指導」 p.p.19～32, 1975.12
28) 片口安史著：ロールシャッハテスト　心理診断法詳説, 1960.
29) 住田勝美他編著：P－Fスタディ使用手引, 1964.
30) 北村・丸山他：ドライバー適性検査資料　（5訂版), 東北大学産業心理研究会, 1967.

本稿をまとめるにあたって国際交通安全学会の木村知可子氏に御支援を頂いた。尚、本稿の基礎になった資料は、筆者らの昭和51年IATSS 研究発表シンポジウム中間報告書である。